

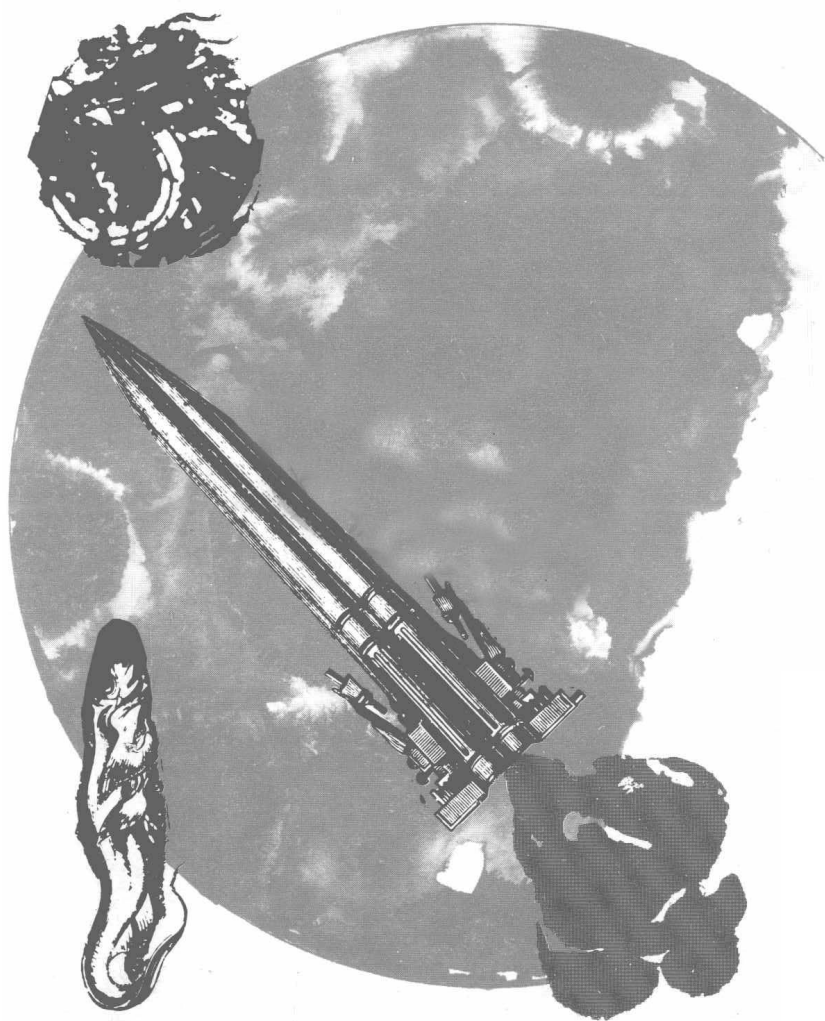
SFベストセラーズ

眉村卓

なぞの転校生



眉村 卓



鶴書房

S F ベストセラーズ

なぞの転校生

NDC913

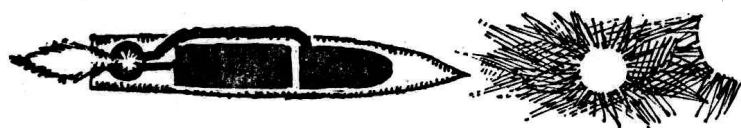
著 者	眉 村 卓
発行者	田 中 博 之
印刷所	凸版印刷株式会社

株 式 会 社 鶴 書 房

東京都千代田区富士見 2-12-2
電話 (265) 4781 振替東京 14521

8393-20206-4815

<7405125>



はじめに

ジュール・ベルヌが『月世界旅行』『地底旅行』『海底旅行』などを書いてSFの世界を切りひらいてから、ほぼ百年がたちました。

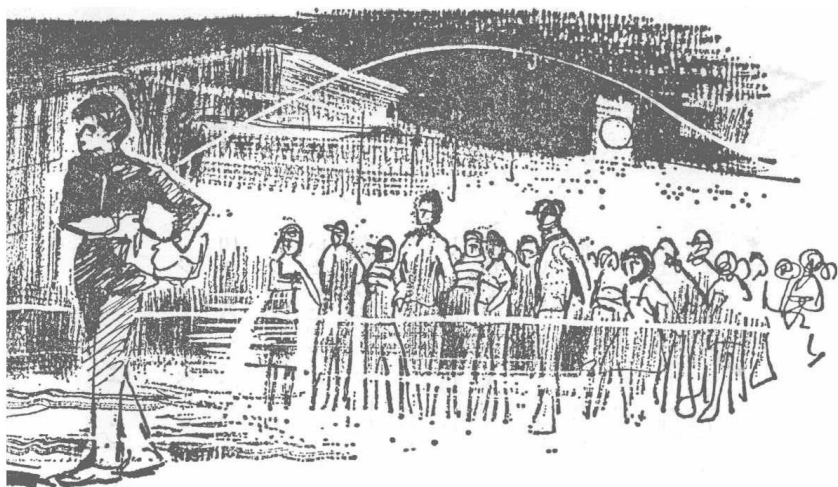
そのあいだに、科学は非常な進歩・発達をとげ、それまでの世界をすっかり変えてしまいました。ベルヌが予想した科学的空想も、そのほとんどが実現しました。しかも科学の発展のスピードはいっそう早くなるばかりです。

こうした科学の時代には、ぼくたちは、それにふさわしい考え方を——大きな、たくましい、常識に^{じょうしき}と^とは^はられない科学的空想力^{くうそうりき}を持たなければなりません。つまり、SF的な空想力を、です。

いま、世界をリードしているアメリカやソ連では、世界でいちばんSFがさかんです。そして、日本でも、SFは非常ないきおいで読まれています。

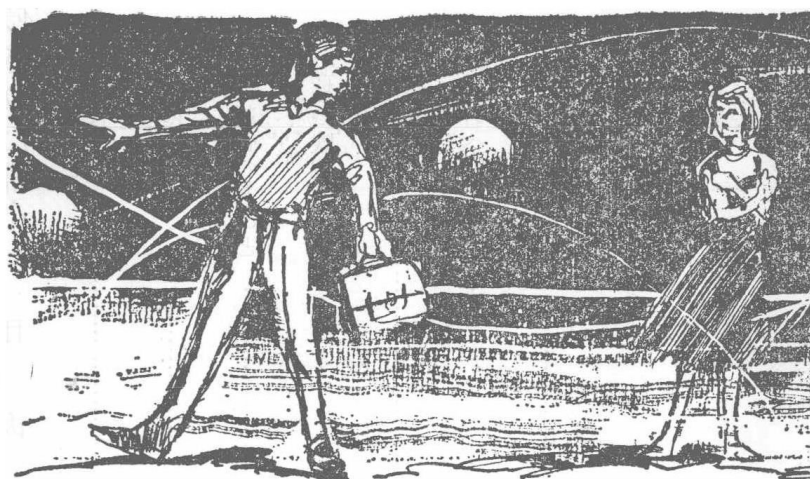
そういう意味からも、日本のSF作家だけの最新作をあつめたこのSFベストセラーズは、すばらしい試みだといってよいでしょう。

ぼくはこのシリーズが、わかい諸君^{しよくん}の明日をきずくエネルギー源^{げん}となることを信じています。



なぞの転校生 目次

異様な少年	8
転校生	13
みどりさん完敗	18
もうじき雨になる	25
軽べつの視線	29
六四〇号室の客	33
典夫のデザイン	39
妙ななかまたち	42
乱闘!	49
ここだけではない	54
にくしみに燃える目	61
ぼく行ってくる	69
不適応者かね	72

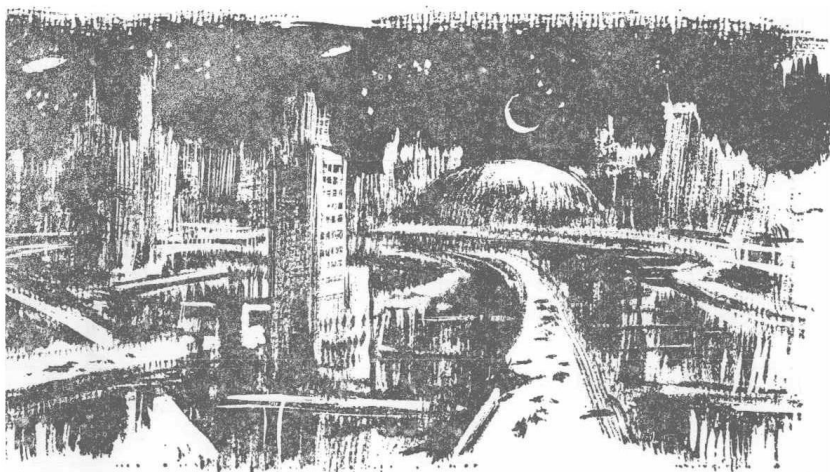


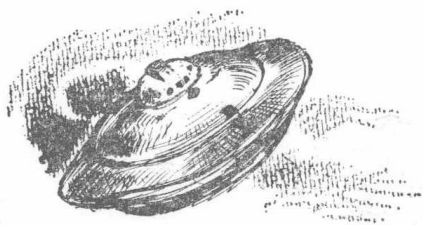
たいへんなの	79
だからうったんだ	85
この世界には住めない	89
全員が消えた	101
からっぽの室内	110
もうお別れだ	117
さようなら	130
みどりのかなしみ	141
なんということだ	147
帰ってきたのね	149
どうして典夫を守るか	160
屋上から降りてくる	166
帰ってきた人びと	170
あしたを作る	174
最後の授業時間	182

侵された都市

目次

いやな予感 ^{よかん}	191
廃墟 ^{はいきょ} の都市	202
地下運動の人びと	212
恐怖 ^{きょうふ} の映画	222
タイムポケット	235
侵略者 ^{しりやくしや} への挑戦 ^{ちうせん}	246
ふたたび平和な地球へ	260





●解説・SF入門

宇宙人はいるか……

……福島

正実……

266

装てい
さし絵
武部
本一郎
桜井
誠





岩田 広一 大阪の団地に住む阿南中学二年

生、学級委員をしているりこうで落ちつ

いた少年。

山沢 典夫 広一のアパートの隣に引っ越して

きた少年、美しすぎるほどととのった顔

をして、スポーツに勉強にすばらしい才

能の持ち主。だがときどき放射能におび

えたり、ジェット機の爆音におそれたり

奇妙なふるまいがある。

香川 みどり 広一のなかよしのクラスメー

ト、卓球の学校代表でもあるほがらかで

しっかりした女生徒。典夫が転校してか

ら、しだいに典夫に好意をよせはじめる。

大谷 先生 広一たち二年三組のクラス担任の

先生、きびしいが、広一たちに理解ある

やさしい理科の女先生。

《登場人物》

なぞの転校生





異様な少年

よく晴れた日曜日だった。

朝食が終わると、広一はすぐバットとグラブを出して、でかける用意をはじめた。

「あら、どこへ行くの？」

母がたずねる。

「クラス対抗の試合なんだ。」

広一はちらっととけいを見ながら答えた。

「早く行かなくちゃ。」

「勉強、したの？」

「広一が自分で責任をもつさ。」

奥のへやで新聞をおり返しながら父がそういった。

「こんな団地住まいじゃ、せいぜい運動でもしないと」

からだがなまってしまふからな。」

「行ってきます。」

広一は鉄のドアをボタンとならしてろうかへ出た。ろうかといっても、ここはいわゆる市街地住宅という型で、左右にずっと通路がのび、ドアがいくつも並んでいる。

広一はエレベーターに乗りうとして歩き出しながら、なにげなく隣室のドアを見た。名札がかかっている！

ついきのうまで、ここはあき室だったのに、いつの間に引越してきたんだろう。

かれは足音をしのばせて、その六四〇号室に近づいた。わずかに開かれたまどの奥には、いつはこび入れたのか、ソファーや冷蔵庫などがきちんと並んでいる。そればかりか、人の話し声までしているのだ。

おかしいな……広一は首をひねった。これだけのどうぐを持ちこむとすれば、一時間や二時間ではすむはずがない。とすれば、ゆうべのうちか、きょうの夜明けにでも引越してきたのかな……。

しかし、あまり長くは考えていられなかった。軽い足音がドアの内側へ近づいてきたからである。つぎの瞬間、六四〇号室のドアがあいた。

出てきたのは、広一と同じ年ごろの少年である。が、それはどう見ても、ただの日本人ではなかつ

た。髪も、ひとみも黒かったが、ととのった顔だちといい、ひきしまった筋肉きんにくといい、まるでギリシア彫刻ちようこくを思わせるような美少年だったのである。

「何か……用ですか？」

少年は、いった。

「いや……なんでもないんです。」

広一はわれに返ると、頭をひとつさげて自動エレベーターの前へ行った。

ところが、少年のほうも何か用事でもあるのだろう。広一と同じエレベーターに乗りこんできたのである。

なんだかへんなぐあいだった。のぞき見をしていた家の人とふたりきりで、同じエレベーターに乗っているのだからむりもない。ふたりはだまりこくったまま、からだをエレベーターの降下こうかの感覚かんかくにまかせていた。

突然、ガタンと音がした。同時にエレベーターの中はまっくらになったのだ。

停電ていでんらしい。

広一はしたうちした。急いでいるというのに不運なことだ。こうなればとにかく外へ出て、階段かいだんを降りるほかはない。



非常停止^{ひじょうていし}のボタンを手でさぐっていた広一は、しかしぎよっとしてふり返った。パッとせん光^{こう}がひらめいたからである。

それは少年のポケットライトらしかった。その光がしだいに収束^{しゆうそく}し、小さな円光になると、少年はライトをドアにむけた。

たちまち塗料^{とりよう}のこげるにおいがした。つづいてドアが赤くなり、ゆっくりととけはじめたのである。

「きみ！」

広一は驚^{おどろ}いて少年を制止^{せいし}した。

「そのへんなの、何か知らないけど、ドアに穴^{あな}をあけることなんかないよ！」

「ほっといってくれ！」

少年はあえぎながら、そのレーザーにも似^に

た光の焦点をジリ、ジリと移動させている。

「やめろ！」

広一がどなったとき、パッとエレベーターの照明がともった。それとともに、ふたたびふたりのからだはゆっくり降下しはじめていた。ほんのわずかの間の停電だったのだ。

広一はドアに目を近づけた。一〇センチ平方ぐらいにわたって塗料がはげ、小さな穴があいている。「なんということをするんだい。」

少年に目を転じたかれは、思わず口をつぐんだ。

少年の目は、異様に大きく開かれている。その顔は何者に対してか、憎悪にみにくくゆがんでいた。広一の背をぞっとしたものが通り抜けていった。

この少年は何者だろう……これほど恵まれたからだと顔をもっているながら、エレベーターの中ではんのわずかの間とじこめられただけで、あんなぶっそうなものを持ち出す——第一、あんな小さなもので金属をとかせるようなどうぐなど、広一はいままで聞いたことも見たこともなかった。

ドアがあいた。一階についたのだ。壁にせなかをくつつけて、まだ息をはずませている少年をそのままに、広一はバットとグラブを持つと外へ飛び出した。これ以上、へんな少年になどかまっていられなかった。

だが、広一とその少年の關係はそれだけではすまなかつたのである。
そのことは翌日の月曜日になつてわかつた。

転校生

みんな思い思いにノートをくったり、教科書を読んだりしている。

一時間めがはじまつて一〇分も過ぎたというのに、まだ先生はやつてこなかつた。

「大谷先生、おそいわね。」

隣席の香川みどりが広一にささやく。

「何かあつたのかしら。」

そのとき、教室のとびらがあくど先生がはいつてきた。いや、先生だけではない。ひとりの生徒がそのうしろについていたのだ。

広一はぼう然として教だんを見つめた。その少年こそだれあろう、あのきのうの妙な隣人だつたのである。

クラスがちょっとざわめいた。少年の美ぼうにいささか驚いたのである。

「岩田くん、何をしているの？」

大谷先生が鋭い声でいい、広一ははっと気がついた。彼はクラス委員である。

「起立！」

広一は叫んだ。

「れい！」

二年三組の全員は、がやがやと席についた。

「きょうはこのクラスにひとり、あたらしいお友だちを紹介します。」

先生は少年を教壇に立たせた。

「山沢典夫くん……東京から転校してきました。大阪ははじめてですから、みんな仲よくやってください。」

それから少年の肩に手をかけた。

「さあ山沢くん、自己紹介をなさい。」

「山沢典夫です。」

少年はちょっと微笑すると、静かにいいはじめた。きのうとは、にてもにつかぬ態度だった。

「趣味は別にありません。得意学科というものもあります。それから乱暴な人はきらいです。ぼく